

プロジェクト全体の研究経過及び研究成果

3年間における研究活動

令和3年度

1. 研究会開催

- (1) チェコカレル大学ノボトナー教授を池田記念美術館「八色の森美術展+子どもの絵画展」地域連携企画「哲学対話」に招聘予定であったがコロナウイルスによる社会状況を鑑みて中止した。
- (2) 生徒の主体的な主題生成と活動の姿とを見取る表現活動実践交流会を、1～2か月に一度程度、オンラインまたは岡山大学にて実施した。学生も協議に参加し、附属中学校でのカリキュラム及び題材について教育実習で学生が実践し、その後の学生の研究テーマとしても活用している。

2. 調査活動

- (1) 池田記念美術館「八色の森美術展+子どもの絵画展」に出品作家や研究者として参加し、出品作の制作から展示、市民との交流までの一連を、幼保から高等学校及び大人との地域連携企画「哲学対話」他の実施と参与観察調査により、学校・美術館・地域の円環的探究プロセスと実践の様相を博士課程院生と調査した。
- (2) ファーストリテアリング財団地域支援事業「地域コミュニティを通じた若者への教育支援の可能性」南魚沼愛みらい塾「YouKeyプロジェクト」の参与観察と企画運営と同プロジェクトの推進をした。
- (3) 第11期教育課程開発研究(3年次)上越教育大学附属小学校創造活動「ぐるっとバス紀行」の学びの過程に参与観察し、校内での木造バスの運行、児童による市内バス路線のフィールドワークによるビデオクリップ作成等の創造的対象の媒介による活動における児童の学びの過程の生成と変容を調査した。
- (4) 文部科学大臣指定研究開発上越市立大手町小学校「探究力を支える資質・能力の構造一本質への問いを生み出すカリキュラム・マネジメント」について、年間を通じ「創造領域」の単元構成、学びの過程、職員研修の共同生成的アクション・リサーチを実施した。
- (5) 高島市立安曇川中学校との共同研究「美術科におけるICT機器活用の可能性と課題」で、ICT機器を効果的に活用した授業実践を実施・検証し、成果や課題を学生と共有することで、教員として必要な資質能力を高めた。
- (6) 滋賀県中学校美術教育連盟と共同で「チームで考える授業づくりⅢーインターネット会議を利用した教材開発ー」により、滋賀県内美術教員の共有システムをつくり、複数で題材開発や省察することで多角的で客観的な教材研究につなげた。成果を学生と共有し、教員として必要な資質能力を高めた。
- (7) 会津若松市主宰「あいづまちなかアートプロジェクト」に参加し、地元の中学生との共同制作を行った。若松一中学校、若松二中学校の美術部に在籍する生徒30名と教員2名とともに、市内施設内のガラス面にステンドグラス制作をした。会津地方の伝統文化である「絵蠟燭」について老舗蠟燭店をリサーチし、テーマを元に作図を行った。生徒たちは互いのアイデアを確認しながらグループワークを行いながらイメージ図を作成して総合した下図にまとめてガラスへ描画した。作品は制作中を含めプロジェクト会期中に一般公開した。
- (8) 令和4年度内モンゴル自治区実施予定「授業」研究開発を博士課程修了院生の内モンゴル研究協力者額爾敦氏（呼和浩特民族学院）と遠隔で進めた。

3. 研究成果の公表等（*学会誌論文等）

- ・松本健義・大平修也, 芸術的行為により形成されるヘゲモニーと共感的関係に関する研究, 教育実践学論集*, 第23巻, 2022年
- ・武田信吾・松本健義・栗山誠, ペア児童の描画活動における相互作用への質的アプローチ描画空間の共有状況についての検討, 美術教育学研究*, 第54号, 2022年
- ・村田透・新関伸也・松本健義, 「造形遊び」における子どもの問題解決ー子どもと大人との協働的な関係性に着目してー, 美術教育学研究, 第54号, 2022年
- ・松浦藍・清田哲男, 創造的態度尺度による中学生の創造性と審美に関する一考察, 美術教育学研究*, 第53号, 2021年
- ・妹尾佑介, 美術教育におけるフロントランナー型創造性モデルの構築に関する一考察ー川喜田二郎の創造性理論を軸としてー, 美術教育学研究*, 第53号, 2021年
- ・宣昌大, 中学校美術科における触覚の再発見を促す実践の一考察ー「触覚オノマトペ」の文字デザイン化を通してー, 美術教育, 305号, 2021年.
- ・大嶋彰, 河野哲也 (立教大学河野研究室), 松本健義, 松尾大介, 大平修也, 茂木和佳子他「哲学対話記録集」『八色の森の美術展 2021記録集』八色の森の美術展実行委員会, 2022年2月, 全30頁
- ・Takeyoshi Matsumoto, Daisuke Matsuo, Akira Oshima, Shuya Ohira, Wakako Mogi. (2022) Philosophical dialogue conducted while looking at the picture in front of the picture, "Yaironomori Art Exhibition 2021 Record Collection" Yaironomori Art Exhibition Executive Committee. (令和4年度海外連携校へ配布)
- ・ANCS事業局清田哲男「創造性が社会と出会う美術教育」上記(1)(2)実践交流会での検討実践を教育美術振興会『教育美術』で公表した。ホームページ<https://www.ancs.site/>で協議内容を公表した。
- ・上越市立大手町小学校著『探究力一本質に迫る問を生み出すカリキュラム・マネジメント』ぎょうせい, 2022.

令和4年度

1. 研究会等開催

- (1) 研究協力者カレル大学(チェコ)ノボトナー准教授を10月16-17日に池田記念美術館「八色の森の美術展+子どもの絵画展」に招聘し、レクチャー「Emancipatory Effects of Artistic Open Form(芸術的オープンフォームの解放効果)」を実施(松尾大介, 家崎萌)。博士課程院生茂木和佳子と金子瞳による鑑賞型哲学対話事例報告を交えて池田記念美術館「開かれた美術館構想ーたおやかなまなざしをめぐる他者との出会い」国際シンポジウムを開催。聴覚障がい者を文化的コミュニティとして受け入れる美術館教育等の方策を示した。
- (2) 神戸大学学術WEEKSシンポジウム「感受することからはじめる子供の造形活動とはー福来四郎の指導による目の

不自由な子供の粘土作品を感じよう」2022年12月10日を開催。

- (3)伊藤将和・湊中学校活動研究発表（一般公開）『とまりぎ美術館で待ち合わせ』第一期10月8日～10月12日会津若松市稽古堂，第二期10月15日～11月6日野口英世青春通り，湊中学校文化祭10月22日を実施。

2. 調査活動

- (1)松本健義・大平修也・茂木和佳子・金子瞳・青木善治「八色の森の美術展+子どもの絵画展と河野哲也氏による哲学対話」と職員研修調査：池田記念美術館，南魚沼市こども園，小学校，十日町市小学校（9月～3月）
- (2)松本健義・茂木和佳子，「一般社団法人南魚沼愛みらい塾主催 You Keyプロジェクト調査」（5月～10月）
- (3)松本健義・茂木和佳子，「総合的学習，探究的学習，総合探究のアドバイザーと調査」：上越教育大学附属小学校，上越市立大手町小学校，六日町高校（4月～3月）
- (4)初田隆・エルドン「感覚横断的な活動を通して感性的側面より環境意識を高めるための造形プログラムの開発」に関する日中共同研究：共同開発したプログラムを日中（内モンゴル）で実践し，相互比較を交え，結果の分析・考察を行う（8月：遠隔）
- (8)新関伸也・汪夢瑤・香月欣浩・谷村さくら，「ルーブリックを用いた対話による美術鑑賞実践と授業記録に基づく鑑賞過程の記述分析」（5月～2月），滋賀大学附属小学校・同附属中学校での観察調査を実施
- (9)清田哲男・藤田雅也・宣昌大・妹尾祐介・松浦藍「学習者の知識や経験が表現・鑑賞活動における〈感じ取り〉に与える影響についてのアクション・リサーチ」，主に中学校での観察調査を実施。
- (10)松尾大介・M. Novotná・家崎萌，国際情報高校と六日町高校共同ワークショップ「想像の訪問者（imaginary visitor）のための鑑賞ルート」の実施。2013年ブラハの「The municipal House」で開催された展覧会「Art Nouveau-Vital art of 1900-1914」において実施された鑑賞教育等を検証し，「a net of other meanings like woven figures on a sociocultural tapestry」（Fulcová, Svatošová, 2021）の視座から，思考や視線の軌跡を視覚化する鑑賞ワークショップを六日町高校，国際情報高校の生徒を対象として，Novotná，家崎，松尾で計画・実践した。：池田記念美術館（10月）
- (11)松尾大介・M. Novotná・家崎萌，国際共同授業研究の実施と事例収集：上越市立南本町小学校（10月）。家崎の博士課程課題研究の一環として「国際インターンシッププログラム」においてNovotnáと家崎によりブラハドゥホヴァー小学校（ブラハ）と上越市立南本町小学校とで交流した経緯に基づき，南本町小学校児童を対象に図画工作の協働授業研究をNovotná，家崎，松尾で計画し実践した。
- (12)伊藤将和・佐藤香・大政愛・佐藤晴喜・会津若松市教育委員会・同市立湊中学校・NPO法人みんなと湊まちづくりネットワーク「地域の資源を活用しテーマとする芸術作品の共同制作：みなとにつたわる物語」アートプロジェクト（6月～10月）

3. 研究成果の公表等（*学会誌論文等）

- 松本健義・大平修也，中学生の描く芸術的行為による存在との対話と他者との共感的関係に関する研究，教育実践学論集*，第26号，2023年
- 武田信吾・松本健義・栗山誠，描画過程と活動後の対話を通じた造形場の協同生成，美術教育学研究*，第55号，2023年
- 金子瞳・大平修也・松本健義，描く行為の中の省察と現象学的記述に関する研究—造形行為を通じた現職派遣教師の学び，美術教育学研究*，第55号，2023年
- 茂木和佳子「高等学校の探究学習と地域をつなぐ外部組織の意義と可能性—雪国みらいの人材コンソーシアム設立から学びと成長の共同体へ」『生活科・総合の実践ブックレット』*，2022年6月
- 宣昌大「鑑賞時の作品背景を知ることと見る・触る行為との関連についての一考察」，日本基礎造形学会『基礎造形』*，031，2023年3月
- 大嶋彰，河野哲也（立教大学河野研究室），松本健義，松尾大介，家崎萌，Magdalena Novotná，金子瞳，茂木和佳子他『八色の森の美術展 2022記録集』八色の森の美術展実行委員会，2023年
- 香月欣浩：第61回大学美術教育学会宮崎大会、口頭発表：「造形活動における支援者の間接的な指導と幼児の行為」2022年9月17日
- 香月欣浩：日本美術教育学会セミナー発表「造形活動における幼児と支援者の在り方」2022年10月16日
- 谷村さくら：第61回大学美術教育学会 宮崎大会、口頭発表：「造形材料としての土粘土の状態変化を生かした実践研究—小学校低学年と中学年の活動比較を通して—」2022年9月17日
- 第71回日本美術教育学会瀬戸内大会「触覚を中心とした感受アート授業の実践からの一考察」2022年8月19日

令和5年度

1. 研究会開催

- (1) 日本教育実践学会第26回研究大会シンポジウム「世界への対話として創造される学びと教育の実践—子ども、学校、社会—」において，研究協力者・哲学者の基調講演「子どもの哲学における時間について：教育的な時間」後，「地域に開かれた美術館構想」（美術館長）「八色の森の美術展と哲学対話」（美術展運営委員・作家）「八色の森の美術展と子どもの絵画展」（元学校長・プロジェクトメンバー）「地域連携協働による高等学校探究総合」（高校教員・博士院生）によるシンポジウム開催（12月）。池田記念美術館で実施した令和3年以降3年間の地域連携協働のアクション・リサーチ成果報告をした。松本が講演とシンポジウムの企画及びコーディネーターを務めた。

2. 調査活動

- (1)「八色の森の美術展と子どもの絵画展」及び鑑賞型哲学対話調査（8月～10月）
- (2)池田記念美術館主催「美術館発！高校生向け探究プログラム 展覧会企画に挑戦」（令和6年度池田記念美術館で開催予定）連続ワークショップの開催と生徒の学びの過程の調査：巨大シートで美術館屋外空間へ働きかけよう（8月），「美術展の裏側をのぞいてみよう」（8月），「作家による作品解説を聞いてみよう」（9月），「作品を鑑賞して対話してみよう」（9月），「想像の訪問者のための鑑賞ルートを作ろう」（9月），「イエスの像」（10月），「冒険芸術論」（11月），「トマソン」（11月），「ピカソを超える！」（12月・1月）

- (3) ワークショップ「想像の訪問者のための鑑賞ルートをつくろう」は高校生によって企画される展覧会に向けたプログラムの一つとして、松尾、家崎（鳴門教育大学・博士課程終了院生）、茂木（博士課程院生）が企画し実施した。このワークショップは、令和4年度に日本とチェコ共和国の共同企画により実施した鑑賞ワークショップから展開させ異なる高校生が美術館を共に探索する体験を通じて見方や考え方を深める鑑賞活動として構成した。
- (4) 小林古怪記念美術館主催、高校生講座『描くこと』（9月）：高校生を対象に、「描くこと」をテーマとした絵画生成の過程や素材について検証するワークショップを開催。
- (5) 上越教育大学附属小学校創造活動「できたてキッチン」のアクション・リサーチ（4月～3月）

3. 研究成果の公表（*は学会誌論文等）

- ・青木善治, 教師の変容と省察を促す研修の在り方に関する一考察—立体作品審査・鑑賞研修会における事例から—, 教育実践学論集*, 第25号, pp. 65-76, 2024.
- ・松本健義・大平修也・竹本悠太郎・松永澤奈, サイト・スペシフィック・ワークにおいて経験される学びとつくり出される造形物の作用に関する研究, 教育実践学論集*, 第25号, pp. 11-26, 2024.
- ・香月欣浩・松本健義, 造形活動における子ども主体の表現を導く保育者の関わり, 美術教育学研究*, 第56号, pp. 97-104, 2024.
- ・山中慶子, 幼稚園の年少, 年中, 年長児における表現行為の傾向に関する研究—牛乳パックピースを使った実践での他者との相互行為の違いを中心に—, 美術教育学研究*, 第56号, pp. 281-288, 2024.
- ・山中慶子, 幼小接続期における「造形行為を伴う遊び」の好みと教科学習への興味との関係, 美術教育学*, 第45号
- ・松浦藍, 創造性と美術教育との関係についての—考察—学制発布以降から現在に至るまでの日本の色彩教育との関係を中心に—, 教育実践学論集*, 第25号, pp. 1-12, 2024
- ・宣昌大, 触覚。嗅覚・聴覚を働かせて対象を観察する体験が観察態度に与える影響に関する—考察—集団学習での交流を伴う活動を通して—, 教育実践学論集*, 25, 2024, pp. 127-137
- ・妹尾佑介, 美術教育における自律・他律の対立構造についての—考察—「主体性」に関する論考を手掛かりとして—, 美術教育学研究*, 第56号, 2024年, pp. 137-144
- ・妹尾佑介, 表現主題生成時の自己と環境との間に生じる矛盾による学び—高校生が困難を自己の表現主題に変える授業場面に着目して—, 美術教育学*, 第45号
- ・Yusuke Seno, A Study of Environmental Settings that Promote Creative Activity. 2024 Asia-Pacific Arts and Humanities International Conference.
Analysis of Students' Creative Activities Using the Front-Runner Creativity Model
- ・学会発表「他者と共創する『想像の訪問者のための鑑賞ルート』—日本・チェコの共同企画による美術館ワークショップの検証—」第62回大学美術教育学会香川大会, 2022年に日本とチェコ共和国の共同企画により地域の高校生を対象に池田記念美術館で実施した鑑賞ワークショップについて, 家崎萌, 松尾大介, 茂木和佳子が「社会と文化を形成するつなぎ目」や「他者との共感的実践の媒体」の具体化される過程とその実際を検証し発表した。(9月)
- ・大嶋彰, 河野哲也, 松本健義, 松尾大介, 茂木和佳子他, 『八色の森の美術展 2023 記録集』八色の森の美術展実行委員会, 2024年2月
- ・松本健義, 世界へと向かう子どもの行為と体験による学び—生成変化する身体・わたし・世界, 教育創造, 第199号, 2023年
- ・青木善治, 松本健義, よさを発揮し個性を認め尊重し合う子どもの育成に関する教育実践研究—コロナ禍における共同制作の活動を通して—, 上越教育大学研究紀要, 2023年
- ・掛健二, 丸山悦子, 若林匠美, 松本健義, 「探究」領域の単元構成における「創造される対象」を媒介とした学びの過程に関する研究—小学校第2学年「青空ひまわりレストラン」—, 上越教育大学研究紀要, 2023年
- ・青木善治, 教師が「教えない人」になれる時間—15分間の「朝鑑賞」が子どもの自己肯定感をはぐくむ, 東洋間出版, 2024年

3年間の研究成果

- (1) プロジェクトZの目的は授業研究, 教員養成, 地域連携の連環による学びの研究プロジェクトにある。学びのプロジェクトは, ①表現及び鑑賞の学びのデザイン, ②学部, 修士, 博士に一貫する教師教育の学びのデザイン, ③大学と地域と学校のあいだの分断のない学びのデザイン, 以上による学びの実践の具体化を目指した。それぞれの過程で生成変化する学びの実践過程の質とその在り方を, (a) 関係, (b) 過程, (c) 当事者の視点において各チームの対象フィールドでの実践, 記録, 分析考察に努めた。
- (2) プロジェクトメンバーをリーダーとする各チームの調査研究のデザインにおいては, アクション・リサーチの実践的構造とその特性の観点から従来の教室での表現と鑑賞による学びの在り方を転換し, 美術教育の目的, 内容, 方法, 在り方の拡張と転換を目指した。
- (3) 本プロジェクト参加院生各自の博士課程での自身の研究との関係において, 研究のデザイン, 目的と方法を, 特に参与フィールドとの協働の特性において実践的かつ臨牀的に学ぶことを同時に重視した。本プロジェクトで対象としたフィールドへの参加者は, 幼児から高校生や成人まで多様な年代に及び, 各アートワークやアートプロジェクトにおいて多様な世代が混在して協働的に活動した。参加者も児童生徒の他に, 出品作家, 哲学者, 研究者, 教師, 大学生, 行政関係者, 美術館学芸員・館長等多様である。
- (4) 多様な対象者が混在する多様な実践の在り方に対して, またその参加者間において果たすアートの実践的特性や, アートの実践が創造的に架橋したり, 創造的に新たな協働や探究の場をひらく可能性や潜在性を模索し, 芸術教育学実践としてかたちにしていくことである。
- (5) プロジェクトメンバー, 参加博士課程院生や修了生, 研究協力者（学校教員, 作家, 美術館関係者, 行政, 海外の教育研究者等）, 参加者（児童生徒, 地域住民）等との多様な実践的で協働的な関係を形成すること。
- (6) その成果を学会誌, 研究紀要, 専門雑誌等へ投稿し論文掲載しながら研究を深化させ推進した。博士論文研究の基礎となる多くの論文掲載ができたことは本プロジェクトの成果である。

- (7) プロジェクト参加院生の内5名は研究期間中に大学等の研究職を得た。内モンゴル自治区呼和浩特民族学院教員額爾敦氏は本博士課程で学位取得後帰国して海外共同研究者として参加している。
- (8) 各チームのアートワークショップ及びアートプロジェクトによるアクション・リサーチの過程は、地域、学校、子供、院生、大学教員の相互の変容を触発して形作っていった。ワークショップやプロジェクトで提示されるアートワークは、参加する児童生徒、作家、哲学者、行政、教育研究者、教員、美術館、地域社会らが協働し相互作用する活動の繋ぎ目となる場を生成した。その実践的場とそこでの活動状況は、上記の多様な人々が参加する過程で、参加者それぞれが相互に変容する共同生成的アクション・リサーチへと生成変化していた。プロジェクトの過程は参加者らがつながり合う関係の重層化と拡張を生み出して、参加者相互に活性化する行為と経験と気づき及び変化を生み出していった。同時にアートワークによる実践共同体という文化的社会を形成していった。
- (9) 人間、社会、文化の変化を学術的専門領域に分離することなく、1つの〈実践/研究〉において〈生成/調査〉する教育実践学研究のアートベース・アクション・リサーチの確立を目的とする博士課程での教育実践研究の実際を、臨床的に経験することが可能な研究の在り方であるといえる。この関係と過程が、教育実践研究の新たなフィールドと、教育実践の社会的文化的パラダイムの創造とを共に提示することにつながるといえる。
- (10) プロジェクト研究員マグダレーナ・ノヴォトナー氏(チェコ共和国、カレル大学プラハ校教育学部美術教育学科)とは、池田美術館でのワークショップとシンポジウム、国際共同授業研究を推進した上越市立小学校での授業実践において、アクション・リサーチの過程と関係を教育実践研究の臨床的過程において共有した。プロジェクトZとカレル大学の教育実践学研究与博士課程での研究者養成では、アートをベースとしたアクション・リサーチの観点及び方法、アートの位置づけにおいて、プロジェクトZと多くの共通点が明らかになった。プロジェクトZの各チームのアートワークやアートプロジェクトのプロセスと在り方について、従来の「美術」とは異なるアートの枠組みと社会的パラダイムにおいて省察し位置づけ研究開発することが今後可能となる。
- (11) 欧州の協働研究組織AMASS (the European project *Acting on the Margins: Arts as Social Sculpture (AMASS)* HORIZON2020 - AMASS/ID 870621, implemented between 2020 and 2023.) によるアートベース・アクション・リサーチ研究のプロトコールと開発に関する論文、及びプロジェクトの実際に関する論文の以下2編を、マグダレーナ・ノヴォトナー氏とマリー・フルコヴァー氏よりプロジェクトZチームが今年度発刊予定の著書掲載論文として提供を得た。
- ① Marie Fulková, Magdalena Novotná, *Acting on the Margins: Arts as Social Sculpture*.
 - ② Magdalena Novotná, Marie Fulková, *Research Protocols in Art Education, their Development and Use in the Project Acting on the Margins: Arts as Social Sculpture*.

以上